【学力向上フロンティアスクール用中間報告様式】（中学校用）

都道府県名	島根県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	鹿島町立鹿島中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	１	１０	２４
生徒数	８７	８６	９２	３	２６８	

Ⅱ　研究の概要

１．　研究主題

『　主体的に学び、豊かに表現できる生徒の育成　』
～基礎・基本の充実を図り、生徒の興味関心を伸ばす選択教科の実践を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

○　２年生・３年生の選択授業９教科
　新学習指導要領の実施によって、選択授業の履修幅が拡大された。自分の特性を見つめ、学習内容を主体的に学びとっていく要素を強く持った選択教科の研究をすることは、今こそ必要であると考えたことから選択教科の授業を実施している。
　２年生は５教科を週1時間、実技教科を週１時間計２時間実施している。３年生は５教科を週２時間、実技教科を週２時間、合わせて週４時間実施している。

○　１年生：理科、２年生：数学
　少人数授業の必要の高い教科であり、教員構成も条件がそろっていたことから少人数授業を実施している。１年生理科、２年生数学共に週２時間実施している。

○　３年生：数学、１年生：数学・英語
　ティームティーチングを行う必要性の高い教科と考えたことから実施している。いずれも週２時間程度実施している。

○　全学年：国語・数学・英語及び走運動（縄跳び）
　自己活動を生じさせ、学習内容を自ら学びとっていくための基礎力（根元的なファクター）は、読解力、表現力、計算力、いわゆる「読み・書き・計算」と英語の読み書き、そして体力と考える。これらの基礎力を高めることが、すべての教科での学習内容の理解を深める基盤となり、これによってわかる楽しさ・できる喜びを得ることで、楽しく、充実した学校生活を送ることができるのではないかと考えた。このことから、全学年で国語・数学・英語及び走運動（縄跳び）のドリル学習を実施している。実施するのは毎日で、終学活前の15分間をドリル学習にあてている。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 　基礎・基本の充実を図り、生徒の興味・関心を伸ばす選択教科のあり方はいかにあるべきか。 ○　研究の見通し 　本年度は選択教科学習の充実を図る研究を中心に据えた。生徒の自発的・主体的な学習を生かす選択教科はいかにあるべきかを考え、生徒の学ぶ道筋に沿った課題解決的な学習を展開すれば、「確かな学力」が身につくであろうと考えた。 ○　研究の内容・方法 ①　ガイダンスの充実 　自らの学びをつくり出していく生徒を求めて授業を構想するとき、特に大切なことは「学習材との出会いの持ち方」であると考える。昨年度までは簡略なものであ

ったガイダンス資料を、本年度は15頁ほどの「選択教科の開設講座案内」を作成し、各コースの学習内容について担当教員がその魅力をしっかりと説明し、生徒たちにアピールすることにした。

② コースの拡大

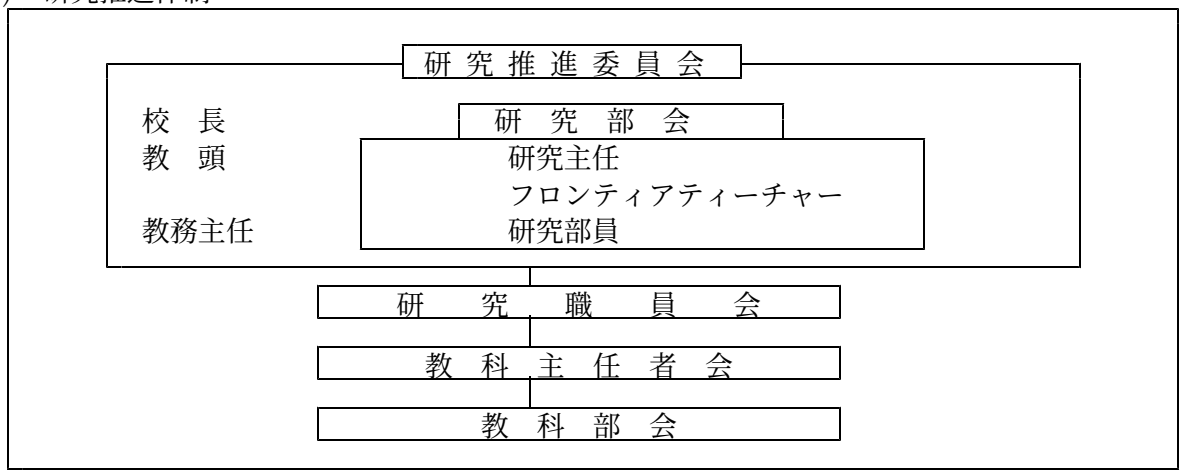
生徒一人ひとりの思いや願いを大切にした活動の設定は、主体的に学びとっていく生徒の育成には不可欠である。生徒たちのニーズにできるだけ対応するために、開設コースを大幅に拡大した。特に、３年生の選択教科の５教科を「補充コース」と「発展コース」に分け、実技教科５つも同様にして、３年生だけで合計20講座を開設した。教員一人の授業時数が増え、出張のあるときは自習になるなどのマイナス面はあるが、必修教科では学べない幅広い学習体験ができている。

③ 生徒の思いを学習プログラムの改善に生かす評価活動

生徒たちの追求過程の中で、どう意識し、どのような変容が見られたのかをていねいにとらえるための一助として、「選択教科振り返りカード」を作成した。これには記述の部分もあり、また数量化を考えた部分もある。グラフ化をし、その分析を通して次週からの授業の改善に役立てるという試みを行っている。

平成16年度	○ テーマ 基礎・基本の充実を図り、教科への愛好的態度を高め、学習材の持つ本質を学びとっていく選択教科の最適な学習過程はいかにあるべきか。 ○ 研究の見通し ・選択教科の補充コースにおいては、基礎・基本の内容をスモールステップで系統的・段階的な学習を展開していけば、学習内容が習得されるであろう。 ・選択教科の発展コースにおいては、生徒の思いと教師の願いが重なるところに学習課題を設定し、自らの手で解決することによって学習材の持つ面白さや醍醐味を味わうことができれば、その本質を学びとっていく態度が形成されるであろう。 ・上記のような生徒と教師が共に満足できる系統的・段階的な学習並びに課題解決的な学習を必修教科との関連から展開すれば、選択教科の最適な学習過程となるであろう。 ○ 研究の内容・方法 ・必修教科との関連による学習材の選定 ・系統的・段階的な学習過程（補充コース）の編成 ・学習課題を形成するための工夫 ・課題解決的な学習過程（発展コース）の編成 ・少人数学習・ＴＴによるきめ細かな指導の継続研究 ・基礎力を高めるドリル学習の継続研究

(3) 研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○　全教職員での共通理解をもとにして

全教員で、学力や基礎・基本についての捉えを共通理解することができた。研究部会や研究推進委員会、研究職員会を通して話し合いをしていく中で、各教員の認識が深まっていったように思う。

(1)　選択教科の在り方について

①　選択教科のガイダンスの充実に関して

以前は４頁程度の簡単なガイダンス資料をもとに、担任が説明をするというガイダンスであったが、今年度はしっかりとした「選択教科の開設講座案内」を作り、それぞれの担当者が詳しく説明をした。以前は、頭に描いていた授業内容と実際が違いすぎて「選択を誤った」ともらす生徒もいたが、今年はそれがなかった。コース選択のための充分な情報の提供という意味で、ガイダンスの充実は大いに効果があったと思われる。

②　選択授業のコースの拡大に関して

生徒たちのニーズにできるだけ対応するために、３年生の開設講座を２倍に拡大した。これは教員の人数の面から考えてぎりぎりの線であるが、その成果も大きかった。

まず、５教科の中から２教科、実技教科の中から２教科選べるという点、「補充コース」と「発展コース」を自分の現状から考えて選べるという点、普段授業を受けることのない先生の授業を選べる可能性が増える点、さらに幅広い学習体験ができやすくなったという点など、いろいろな面で生徒の学習への関心・意欲を高めることになった。

③　生徒の自己評価を生かした授業改善へ向けて

選択教科の取り組みを通して、生徒の自己評価を生かしての授業改善に取り組むことができた。特に、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の四つの観点で生徒の思いを数量化し、折れ線グラフを作って分析したことは、全体的な傾向（教師の願いと生徒の思いの関係）をつかむうえで、大いに参考になっている。

例えば、外部講師の先生を招いて、本物にふれさせる体験ができた授業では、「成果」の折れ線グラフが大きく上昇していたりとか、実験の時間とその準備の授業とでは大きな違いが見られたりなど、なるほどと思われる結果が現れている。逆に、意外な結果になっている場合には、その原因を追求でき、今後の授業の改善に役立てることができた。

(2)　少人数指導やＴＴ指導に関して

少人数指導やＴＴ指導、定期テスト前の補充学習会や、長期休業中の学習会などを通して、授業時間において、目標を持って継続的に取り組む生徒の姿が増えてきている。

少人数などきめ細かな指導においては、学習意欲の比較的低い生徒の多い学年では、教師の目が行き届き、落ち着いて授業を受けさせることができた。今年初めて実施した理科の少人数授業では、教員の立場からは、生徒数が少なくなったために安全面にさらに気を配れるようになった点が大きい。また多くの生徒が、例えば実験の準備や工夫をする時に、先生にいろいろと質問をしたり、確かめたりしやすくなったと答えている。

１・２年の２年間で少人数指導を行い、今年度は実施しなかった３年生のアンケートによると,「少人数学習の方が良かった」と答えた生徒が約４１％、「いいえ」と答えた生徒が約６％という結果であった。このことから、少人数による指導の効果を自覚している生徒が多いということを確認できた。また、現在実施している２年生の数学では、本人の希望を最大限重視した習熟度別指導を行っているので、個に応じた内容に近づけやすいという点で効果があった。また、生徒のアンケートから、「意見や発表が言いやすくなった」という声が多いのも評価できる点である。

２．今後の課題

(1) 少人数授業については、今年度は標準時間を下回って実施したが、現状でも持ち時間が多すぎて、出張などで教員が欠ける場合にその補充ができにくい。自習で対応することになるが、進度に差ができ、その差を埋めるために先に進むことができない、など運営に関していろいろと具体的な問題も出てきている。こうした問題をどう克服していけばよいか。

(2) 評価規準によって、目標に達していないと判断された生徒に対する学習指導の手立てと

その工夫の研究。
(3) 個に応じた、よりよい声がけ・働きかけの在り方の研究。
(4) 補充的・発展的な学習など個に応じた指導の充実のために、今年度は重点教科としなかった数学・社会・英語・音楽・保健体育の選択教科を中心に授業研究を進め、２年次の授業公開を行う。（松江・出雲管内へ案内）
(5) 今年度「保護者からの学校評価」を行ったが、その中で、保護者の学習に関する声として、「学校から出される宿題の量が少ない。」「自分の子は家庭学習のし方が分かっていない。」というものが多く出されていた。学習面においても、今後保護者との連携を密にしていき、家庭学習の習慣化を推進していかなければならないと考える。
　学校でも、家庭学習のし方を生徒に理解させたり、家庭学習の時間を学級の話題にのせながら、「家庭学習は大事だからみんなでがんばろう」というムードづくりを行っていくべきだと考える。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

１．生徒アンケート（振り返りカード・意識調査）
・調査の目的・・・生徒一人ひとりの思いやつまずき、発見などを捉えるため。
・実施内容・・・・「成果」「関心・意欲」「学び方」「協力」の４つの観点で１０項目の質問を行い「はい」：３点、「いいえ」：１点、「どちらでもない」：２点
・実施時期・・・・毎時間
２．定期テスト・チャレンジテスト・単元テスト
・調査の目的・・・学習の成果を客観的に評価していく資料にするため。
・実施時期・・・・定期テスト（年５回）、チャレンジテスト（１・２年学期毎に１回、３年６回）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．第40回八東郡教育研究大会（兼学力向上フロンティア１年次発表）
・期日・・・・平成１５年１０月３１日（金）
２．学力向上フロンティア授業公開
・期日・・・・平成１６年１０月を予定
・内容・・・・数学・社会・英語・音楽・保健体育の選択授業
３．広報活動
　リーフレット・学校だより・ホームページなどを作成し、実践研究の成果の普及・推進を図る。

◇　次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級　□４～６学級　□７～９学級　■10～12学級　□13～15学級　□16学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■ＴＴによる指導　□その他

【研究教科】　■国語　□社会　□数学　■理科　□外国語　□音楽　■美術　■技術・家庭　□保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無

学力向上フロンティアスクールの取組

鹿島町立鹿島中学校

基礎・基本の充実を図り、生徒の興味・関心を伸ばす選択教科のあり方について研究を進めている。多数の選択教科の講座を設け（３年では20講座),「開設講座案内」を用いてガイダンスを充実するとともに，同じ教科で「補充コース」「発展コース」を設けたり，課題解決的な学習を展開したりして，必修教科では学びにくい幅広い学習体験によって学習への関心・意欲を高める工夫がされている。また,「振り返りカード」の数値や文章記述の分析によって，指導の評価と授業改善を行っている。